

## 恩師・川那部先生と私の琵琶湖

司会 一〇周年記念式で講演していただいたあと、引き続きで申しわけありません。

野村 実は、今日はとても緊張して琵琶湖博物館へ来ました。私は一九八〇年に大学で川那部先生の「自然科学1」を受講し、その印象は鮮烈でした。その恩師を前に話をするのは、たいへんなプレッシャーです。答案では琵琶湖のことを書いたのです。

川那部 それは、申しわけありませんでした(笑)。ときどきそういう方がおられて、赤面するばかりです。

野村 今でも答案の内容を覚えてます。母が、琵琶湖は赤潮など水の汚れが大変らしいから、「ちょっと手がかかるけど二度すぎして、合成洗剤をやめて粉石鹸にせなあかん」と、毎日の洗濯の方法を変えました。廃油を近所で集めて、石鹸づくりを協力もしました。父もチューブ入りの歯磨きをやめて塩にしました。そういう住民レベルの琵琶湖を守る取り組みを書いたのです。

川那部 レポートを全面的に覚えているとは言い難くてすみません。しかし、ご両親などのその実行は大きいですね。人口はあれから四割も増えているのに、一般的な水質項目に関する限り、琵琶湖が極端には悪くなってい

ない数値にあるのは、「自分たちがやらなければ」という、地域の人びとの思いと取組みが大きかったからです。

野村 百三十万人を越えましたからね。地に足がついた生活者として、何とかしなければいけないという想いが、他にも、今の里山の動きなどにつながっているのかなと思います。

川那部 その通りです。しかしその後、琵琶湖の水がちつともよくなっていないのも事実ですから、次にはまた、みんな大きく展開していつていただきたいと切望しています。

### 博物館とジャーナリズムでの多様な意見

川那部 そういふことのためにも、琵琶湖博物館の場合は、展示でも何でも、一つの答えを示さずにおのおの来館者に考えてもらおうというのが、そのやりかたです。安易な全員一致はむしろよくない。いっしょに來られた方々のあいだでも、帰りにはいろいろの意見が出て、ああだこうだと議論をしながら考えただけのように、と努力はしているつもりなのですが…。

野村 そういふ気づきの場を作るために、たしかに相当、苦心・工夫をされていますね。夏はほとんど毎年、子どもも連れて博物館にうかがうのですが、毎回の企画展もなかなか面白いのです。川那部 お子たちも連れてですか。

それは嬉しいですね。

野村 父親といっしょに沿岸でシジミを獲った、魚を小さい網ですくった、そういう記憶がたいへん楽しかったものですから。それに、琵琶湖のタニシは、どうして先がみんな欠けているのか。いろいろ考えたりもしましたし。

## 館長対談

# ふるさと・琵琶湖への想い

2006年10月21日(土) 琵琶湖博物館館長室にて  
司会進行 / 用田 政晴

琵琶湖博物館館長  
川那部 浩哉

うん。そういうふうに  
言って下さったのは、  
野村さんが初めてです。



子どもにもそういうことを伝え、楽しみながらまた考えさせたいわけですね。

それはそうと、われわれジャーナリズムも、皆さんにいろいろ考えていただきたいという点は、全く同じつもりでいます。画一的なものだとか全体主義的なものは、ほんとうに怖いんです。客観的にパランスをとりつつ、多様であることを大事にしています。

川那部 しかし一方では、いろいろ議論していく中で、「あのあたりらしいかな」「ぐらいな…」。

野村 何か見えてくることがありますね。

### 「ふるさと・琵琶湖」への想い

司会 放送現場で、琵琶湖や滋賀県のニュースを伝えられるときには、やはり特別な思いなどがおありになるのですか。

野村 客観的に伝えることは大原則ですけど、個人としてやはり気になります。「琵琶湖で、本来

はいないはずの魚がまた見つかった」というだけで、びくっとしたり、水質などが少し良かったと聞くと、ちょっとほっとしたり、すごく気になりますね。

司会 当初からNHKなどのジャーナリズムに身を置こうと思つていらつしゃったのですか。

野村 理学部へ行って、地質鉱物学でもやりたいなと思つていたのでですけど、もつと全体像を見てみたい、という思いとのせめぎ合いがあったのです。世の中というのはどういふふうに動いているのかなという、ある種、俯瞰の目といいますか、そちらのほうに最後は惹かれたのです。

川那部 全体をといつか、いや、むしろ個々のつながりの総体を見てみたいというお考えが大きかったのでしょうか。ジャーナリズムは、それがたいへん重要ですね。

野村 おっしゃるとおりで、視

野の広さとともに、バランス感覚などがすごく大事だと思っています。

琵琶湖の問題もそうですよね。細かい水質の問題と全体の環境の間をいったりきたり。開発や行政の立場など、いろんなバランスが必要なのでしょう。

### 琵琶湖自体が、最大の常設展示

野村 いつもは、どんな番組をご覧になるのですか。

川那部 家ではテレビを見ないので、旅先ではいろいろ見えます。ニュースは、衛星放送を含めてNHKが主ですね。民放でいちばん面白いのは、何といても「コマーシャルです」(笑)。

野村 情報量はいっぱいありますし、映像表現としてユニークで、完成度はすごく高いです。

川那部 時間あたりなら、お金もうんとかかっているでしょう(笑)。

それはそうと、やはり最も重要なのは報道ですね。地味かも知れないし、表面はいつも同じで、「受け身」だと間違っと思われれるかも知れませんが。

野村 常設展といっしょだと思えます。何度も見ていただくためには、よほど完成度が高くないと。美術館も、常設展が充実しているところは、良い美術館ですね。だから、琵琶湖博物館へも何度も来ます。

川那部 なるほど。有難うござ

います。本当はそうですね。

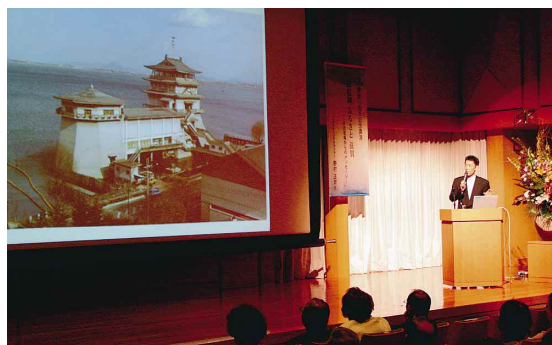
野村 たしか、「博物館はほんの入口」と書いておられましたね、やはり最大の常設展示は、「琵琶湖そのもの」ですよ。この施設は比較的ゆとりたっているし、入口はもちろんです。館内の見学の途中で何度も琵琶湖が広く見えます。そのうえ、ちよつと外へ出れば、いくらでも水に触れられる。そこに生きものがある。ヤナギが生え、シオカラトンボが飛んでいる。これは、すごい常設展示ですね。

川那部 うーん。そういうふうに出て下さったのは、野村さんが初めてです。「ほんものの博物館は琵琶湖そのもの」と言っています。ヤナギが生え、シオカラトンボが飛んでいる。これは、すごい常設展示ですね。

### 『フアーブル一〇〇年展』への期待

野村 一〇周年記念といえ、来年の「東アジアの中の琵琶湖展」もそうですが、とくに再来年の「フアーブル一〇〇年展」はたいへん楽しみにしています。アンリ・フアーブルは、虫の気持ちになるまで、じつと見ていた人ですから、それにフアーブルは、たしか、セミに向かって大砲を撃つたのでした。

川那部 そうです。一回やって



対談前に博物館ホールで行われた野村氏の講演の様子

みたけれど、鳴くセミの数も音量もリズムも、何も変わらなかつたことを数人で確かめ、「耳が全く聞こえないかどうかは判らないが、耳が遠いことというところには、同意しないわけにはいかないだろう」と結論しています。

野村 ああいう実験を考える想像力というのはすごいですね。

川那部 そうなんです。一般に「耳が遠い」と言えるかどうかには疑問がありますが(笑)、あのよくな音に敏感でないというのは、確かでしょうね。観察者としてのフアーブルさんは、みんな高く評価するんですが、いま言われたとおり彼は、野外実験などを駆使した人物、徹底した実証主義者だったんです。だから、見えないものについての「理屈」は気に入らなかつたので、「進化論へのお灸」なんていう節を書いたりしたのでね。

野村 フランスのギユスタブ・クールベは、「画家である俺は、羽の生えた人間なんか見たことがない。だから天使は描かない」と言ったそうです。ドラクロアとかアングルといった先人が、ロマンチックに描いているのを否定するんですが、こういう実証主義的なものがフランスには、ずっと強くあつたんですね。

川那部 フランスの生物学の専門家は、進化論に反対したフアーブルさんなどはだめだというわけで、彼から学ぼうという風潮はほとんどなかつたそうです。日本にはこの人に学んだ人が、

文学関係者だけではなくて、生物の研究者にもいっぱいいると話したら、たいへん驚いていました。少しずつ理解してきたようです。フアーブルさんをちゃんと評価した日本を中心とする、その後の発展を、先ず日本で、そしてフランスで展示することになっていきます。

野村 どういう展示になるのか、大いに楽しみです。司会 ぜひまたその時にもお越し下さい。今日は長時間にわたりありがとうございました。野村 緊張しました。「先生」の前なので(笑)。

### NHKチーフアナウンサー 野村 正育 氏

1962年滋賀県大津市生まれ。京都大学大学院を修了後、NHKに入局。2004年4月から2006年3月まで『NHKニュースおはよう日本』平日7時台のメインキャスターを務め、2006年4月からは『新日曜美術館』、『ネクスト世界の人気番組』の司会を担当。



ヤナギが生え、シオカラトンボが飛んでいる。これは、すごい常設展示ですね。